

ヘルパー日誌 (3)

きいてください 私たちの仕事のこと

大阪・淀川勤労者厚生協会
ホームヘルプステーションあい

伊藤靖美



伝い歩きで流し台まで
いけるようになって



事例

寝たきりから 「復活」した100歳

一〇〇歳で寝たきりから復活した、Aさんのお話です。〇六年に一〇〇歳になりました。庭いじりや料理などほ
でき、ヘルパーが週三回、掃除や買い
物の同行などの生活援助をしてひとり
暮らしをしていました。「これからも自
宅で生活を」と思っていた矢先、下肢
を痛め、動けなくなりました。

ベッドに伏せ、食事はなんとかとり、
排泄は洗面器、という寝たきり状態
です。生活すべてに助けが必要でした。
週三回だった訪問介護を毎日三回
(朝・昼・夕)に変えました。

ヘルパーの仕事は食事と買い物、洗
濯・掃除です。しかし、長年ご自分の
ペースで生活されてきたAさんには、
味付けや食材などに実に細々した好み
がありました。味噌汁のダシに入れる
ジャコの数や仕上げの手順、購入する
ものの産地、「酢の物には酢は使わず、
家で実ったダイダイで」という具合：

頭を抱えなくなることもありました。
共同で入っている三つの事業所の間
でメモやノートを使い、調理の仕方
や味付け、買い物方法やこだわりにつ
いて連絡をとりあい、援助しました。

「入院より死んだ方がいい」

寝たきりになったのは秋。冬に向か
うにつれ、下肢の痛みが強まったり、
体調を崩して食事介助が必要になるこ
とも。事業所が手薄になる年末年始を
在宅で過ごすのは不安でした。

治療を兼ねた入院をすすめても、「な
ら死んだ方がいい」。何度話しても、変
わりませんでした。「そこまで思うな
ら、希望に添える方向をさぐる」と、
ご家族やケアマネジャー、往診、訪問
看護、他の訪問介護事業所と、お正月
を在宅で過ごせる計画を作りました。

皆の努力のかいあってか、お正月を
無事乗り切ると、体調が徐々に改善。
筋力をつけるリハビリも始め、意欲的
になりました。ひとりで座れるよう
になり、立てるようになり、ポータブル
トイレへの移動や、食卓までの伝い歩

きもできるようになったのです。格段
の進歩でした。

手入れできず、もつれてほどけなく
なった髪は短く切り、防寒に毛糸の帽
子をかぶってもらいました。五月には
八カ月ぶりのお風呂。「肌が白くなつた
あ」と冗談まで出ました。

そして〇七年六月、ついに一〇一歳
の誕生日を迎えることができました。
いまは伝い歩きで流し台までいき、洗
面・歯磨きができます。食事の味付け
も「自分でするわ」と。できることも増
えました。最終目標は外出です。

生きる意欲を引き出したのは

ひとり暮らしで高齢・寝たきりの在
宅生活は困難にみえました。しかし「家
にいたい」という本人の強い願いを受
け止め、これに添おうとした私たちの
援助が、本人の生きる意欲、生活やリ
ハビリへの意欲を引き出し、一〇〇歳
の復活につながったのだと思います。

誰にも遠慮せず、自宅で思うように
生活するのが自然ですが、介護制度や
社会環境がなかなかそうはさせてくれ
ません。それでも私たちは、本人の思
いに寄り添って働きたいと思えます。

ほっと介護

76